

早
田

Hina
Hayata

ひ
な

(日本生命)

今や、9名が世界ランキング50位以内という日本女子。強豪ひしめくハイレベルな場となった全日本選手権大会(以下、全日本)で早田は令和初の皇后杯覇者へと登りつめた。優勝直後のインタビューで「たくさんの人が応援してくれていた。絶対諦めるわけにはいかなかった」と、涙ながらに語った。

去来していたのは東京五輪日本代表選考レースの日々。シングルス代表選考対象となる20年1月時点の世界ランキングで早田は6番手。上位2名が代表となるため、すでに望みは絶たれていた。そして、同時に発表された団体戦メンバーにも、早田の名はなかった。19年2月のポルトガルオープンでは、その直後の4月に世界チャンピオンとなった劉詩雯(中国)に勝利するなどの実績も上げていただけに落胆は大きかった。その悔しさ乗り越えて、全日本チャンピオンとなった早田は、興奮冷めやらぬ大会2日後に、彼女のルーツ、石田卓球を訪ねていた。

*文中敬称略

まさかの 全日本優勝

「優勝はもう少し時間がかかると思っていたので、まさかの優勝でした。東京五輪代表の発表後、ここから色々変えて、変わっていかなぎや、変わっていく自分が楽しみだな、と思っていた矢先に優勝。びっくりですよ」と早田は笑顔で話す。

この1月6日、日本卓球協会は、東京五輪シングルス代表2選手に続き、団体戦メンバーを発表。そこに早田の名前はなかった。どのアスリートも最大の目標としている五輪大会。落選はショックだったが、それを力に変えた。また全日本ダブルスのパートナー・伊藤美誠(スターツ)からも大きな刺激を受けているという。

「伊藤選手は、人にならないものを持っていて、だからこそそこまで戦えて、世界ランキングも3位。『美誠は美誠。私は私』と自分らしさを追求していくことが大切だと考えました。

対戦相手を意識することは大切ですが、相手を上回る自分らしさの方がもっと大切だと感じました。

例えば、今まで負けている相手に対して「こうした方がよかつたのかな、ならば違う練習をしてみようなど、相手に

とらわれて、基準となる「軸(戦術)」がブレることが多く、特定の選手には勝てるけど、他の選手には負ける、という試合が凄く多かった。

そこで軸をドンと構え、軸の幅が広がるよう、集中して取り組み、練習を重ねていく。すると軸がブレることがなくなり、競り合いや最後の1本の駆け引きで得点出来るようになりました」

全てを 超越するために

「ノースアメリカンオープン(19年12月1日開催)が終わり、五輪代表レースも終わりました。それまでは切羽詰まっていたというか、余裕がなく、なかなか自分を変えることが出来ずに、同じ様な負け方をしてしまう試合が多かったと思います。

世界選手権の選考会も終わり、自分がどういうプレースタイルで戦っていきたいのか、どういう選手になりたいのか、人としてはどういう風になりたいのか、と考えるようになり、1月6日、五輪代表発表の日、伊藤選手の練習場でダブルスの練習をしていて、そこから帰る時に、今後どうしていくか、ノートにしっかりと書き出して決めました。

「まずは相手が誰であろうと自分のプレーをしっかりと出すこと」。そこから

自分の『軸』を作る



優勝直後、皇后杯を手に



全日本選手権優勝後、優勝報告のため、石田卓球クラブへ



右から石田眞行さん、千栄子さん、早田選手、石田大輔コーチ

石田卓球クラブを代表する選手へ

早田は4歳から卓球を始めた。たくさんの方が早田を応援し、背中を押してくれた、と話す。

「最初に卓球に出会ったのは公民館。そこにいた方が、卓球をするなら、石田卓球クラブに行きなさい、と電話をくださいました。姉が、石田卓球クラブに通っていないければ、私も行っていないかっと思ひます。」

最初は県大会ぐらいで優勝すればいい



優勝後、ベンチの石田大輔コーチと涙の握手

球目で失点してしまい、得意の技術までつなぐことが出来ません。それだけでなく、試合は自分の思い通りに進むことはありませんし……」

「世界選手権代表選考会から全日本までの3週間。残された少ない時間の中で変えたのは、練習内容というわけではありません。大きく変えたのは意識です。練習では間に合わなくてもいいから、手だけで反応せず、とにかく足を動かして反応する。いずれば取れるようになればいい、という考えです。悪い癖をつけたい、良い癖をつける。正直、練習では全然うまくいかなかった。ですが、試合では無意識のうちに動ける。やってきたことは間違いなかったかな、と思ひます」



早田は、シングルス準決勝で伊藤に、決勝では石川佳純(全農)に勝利。初の決勝の舞台も緊張はなかったという。

「今年のテーマは『挑戦』。緊張した場面を想定して練習を積み重ねてきたことで、それが嬉しさというか楽しさに繋がって、全日本で緊張はしませんでした。卓球って面白いなって思ひました」

チャンピオンに欠けていた「モノ」

努力を続ければ、表彰台に上られる。しかしチャンピオンにはなれない。チャン

いかな、と思ひていましたが、石田卓球クラブの選手はみんな実力があり、初めて出場した全国大会では私だけ予選リーグ敗退。悔しかったです。クラブのみんなが強かったから、毎日が勝負だったのを今でも覚えています。

その中で、毎日バンビ台で腰を痛めながら球出ししてくれた石田千栄子先生。小学2年生から、私に基礎を叩きこんでくれた任冬(リンド)コーチ。私のために会社を辞めて、中学3年次から指導してくださっている石田大輔コーチ。石田眞行先生、石田弘樹コーチ、石田眞太郎先生には本当にお世話になってますし、私が言うのはおこがましいですが、家族のような関係だと思ひています。私は本当に石田卓球クラブが好きなんだな、と思ひます。私の原点です。応援してくださる人のおかげで頑張れます。人として、卓球選手として目標とされる人間になるのももちろん、石田卓球クラブを代表するような選手になりたいです。

もちろん、父も母も、毎日の送り迎えや、居残り練習にも文句一つ言わず付き合ってくれて感謝しています。」

早田ひな、というスタイル

全日本で優勝したが、勝負はこれから、またまた、と話す。

ピオンに相應しい心技体智の全てを兼ね備えてこそ、頂点に立つことが出来る。全日本の早田は心身ともに充実していた。

「今までなんとなく頑張っていただけ。頑張りの基準が低くて、結局のところ頑張っていないかったんだな、と思ひました。今年は限界を作らないで、色々なことに挑戦して、嫌だったことにも向き合うようになりました。」

例えば、サーブ練習をするべきだけれど、睡眠時間を優先してしまったり、大事な場面でサーブが台から出てしまったことが原因で負けても、見て見ぬフリで、悔しさから逃げていました。今年に入ってから、気になったことはその日のうちに解決しなければいけない、と行動するようになりました。

そういう努力をすることが大切ですが、それが一番難しいことだと思ひます。努力すれば強くなりますが、努力するまでが一番大変なんですよね。一度努力してみれば、こんなことが出来るようになったんだ、と楽しくなって、楽しさが嬉しさに繋がって……。自分に対して厳しく、自信を持ってプレーして、毎日、緊張感を味わいながら厳しい練習を続けていけば、五輪や世界選手権で金メダルを獲ることも夢でないと思ひます。今回の優勝で、次のステップに進めたいと思ひます」

「石川選手、伊藤選手、平野選手と比べたらまだまだです。良くて30%、いや25%ぐらいは追いつくことは出来たかな、と思ひます。」

私を評価してくださる方もいらっしゃると思いますが、メンタル面、技術面、私生活などまだまだです。

今回、優勝したことによって、もっとやらなければいけないことが分かりました。逆を言うと、やるべきことが完成されたらどんな選手になれるのだろう、という楽しみもあります。

次のオリンピックを目指すのはもちろんですが、今は世界選手権(韓国)が目標で、中国選手がライバルになってくると思ひます。私の武器はパワーある両ハンドドライブで、そのパワーは中国選手にも通用すると思ひます。1日1日限界を作らず、自問自答しながら色々なことに挑戦していけば、また大きな成長に繋がるはずですよ」

原点である石田卓球クラブ、応援してくれる人に支えられ、成長させられた、と早田はインタビュー中に何度も口にした。その気持ちに嘘はないだろうと感じる。

取材後、石田卓球クラブの生徒一人ずつと写真撮影に応じ、サインをプレゼントしていた。ひなちゃん、ひなちゃん、とみんなに愛される選手となっている。全日本チャンピオン・早田ひな、の人生がこれから始まる。